

## 「プラン」検討過程における諸論点と新政策への期待

○岡田 秀二 (岩大農)

はじめに

新たな市町村森林整備計画や森林経営計画制度の実施を目前に控えているが、「関係者は依然として後方において様々な方向を見ながら足踏みを続けている」、そんな情景を目にすることが少なくない。報告は、「再生プラン」検討過程における種々の議論を踏まえ、そして、改めて「森林・林業基本計画」としてまとめられた今日段階の林政を「再生プラン」期林政と捉え、その林政史上における画期性と林政論からする特徴点の整理をし、関係者の「再生プラン」理解促進の一助としたい。

整理と考察

「再生プラン」期林政の画期性や特徴点は以下の点にある。

- ① 「再生プラン」が国家の最重要政策である「新成長戦略」の基軸政策のひとつであること
- ② 政策形成・プロセスのガバナンス化とイノベーションの進展があること
- ③ 計画制度の分権化・地方主権化が新たな段階を迎えていること
- ④ 人工林資源の本格的利用段階に入り、路網と機械による伐出システムのイノベーションが待ったなしであること
- ⑤ 政策の実効性確保と重層的成果実現が強く意識されていること
- ⑥ 森林経営計画制度が創設されたこと
- ⑦ 論理として「第3の道」への方向性があること
- ⑧ 「日本型フォレスター制度」が大きな位置を占め登場していること
- ⑨ 産業軸的林政論において、川上から川中・消費者を含めた大産業循環を強く意識していること
- ⑩ 森林組合の役割変更が打ち出されたこと、等である。

報告においては各々の大事な点と思われることを補足したい。また森林経営計画については、掘り下げた分析を示してみたい。

ところで、「再生プラン」はやっと実施段階に入ったところである。期待する姿への歩みが遅々としていたり、その段階で新たな問題が生じたとしても、それをもって直ちに「再生プラン」や改革をやめにするということにはならない。森林・林業セクターとして後がない状況の中で、多くの林業経済学会会員も参加・議論をしてまとめたものである。引き続き改良・修正のプロセスこそが大事である。ましてやこの「再生プラン」は、3.11以後のわが国が改めて共有すべき新たな社会づくりへの論理と方法論を携えている。そのことの重要性・先駆性に過小評価があってはならない。

キーワード：森林・林業再生プラン、新成長戦略、森林・林業基本計画、森林経営計画制度

(連絡先：岡田 秀二 shujisan@iwate-u.ac.jp)